

「韓国語」を学び始めて半世紀！

芳賀 普子

「韓国語」を学び始めて半世紀！

う、と考えてしまふ。

村野氏から光栄にも「水源地」原稿執筆のお話を頂いた。その際「ペンネームでも可」というアドバイスを頂いて、ペンネームなど持っていないよ、と思いつながら、かつて、本名を使えなくて匿名で短い文を書いていた時期もあったことを思い出した。五十年近くも前、韓国・朝鮮に関する話題や報告を運動誌などに超短文を書いたときの話である。

一九七〇年代前半という時代には、韓国では詩人金芝河（一九四一～二〇二二）が、「燃え上がる南は反乱の地」で「一九七四年の一月を死と呼ぼう」と表現したように、戒厳令も敷かれて、どのようにでも引張ることが可能な法の下に市民たちは怯え、多くの政治犯は作り出されていた。韓国政治犯救援運動にかかわり、日韓を往復していた私だったから、当局には筒抜けだろうとも、（在日朝鮮人総連合会）にも属する先生たちから「朝鮮語」を学んでいた者としては、気を付けなければ韓国の知合いたちに迷惑がかかるという状況だったのだ。

今年は関東大震災一〇〇周年で、朝鮮人・中国人虐殺事件も様々な場所で取り上げられている。朝鮮語を始めた時にも「関東大震災朝鮮人虐殺五十年」という集会が開かれて聞きに行ったものだ。それから五十年。五十年前のイベントに比べるとやはり映画界なり、演劇界なりも意気込みは違う。これらのイベントに接した人々から次世代につながってほしいな、また五十年後にはどんな内容と形で伝えられるのだから

そんなことで、五十年経っちゃったと気が付いた。半世紀も前に始めた韓国語が全然たいしてできないことは正直恥ずかしくあるので、大っぴらにしたくない気もするけれど、事実です。最近の韓国語を学ぶ人たち、特に若い人達の韓国語力は質量ともにレベルが高くなっていて、五十年前には想像もできなかった状況で、韓国語を使うことにおいてはとても彼らにはかきません。

『冬ソナ』から韓流ブームに乗った人たちの子供たちは今や二十代で、母親の影響で韓国語も韓国料理もなじみがあるという若人も多いし、BTSなどの影響で中学生から韓国留学を目指す子もいるとか？！というところで、私が朝鮮語を始めた当時「なんで、朝鮮語なんて？」とか、「キムチ臭い！」とか言われたりといった差別的まなざしが、軽々と民間市民の文化交流で乗り越えられた感もある。

でも、ちよつとこの拙文のタイトルに戻ってほしい。「韓国語」が途中で朝鮮語になっていくのでしょうか。韓国語は在日韓国人一世から習う場合に使われた呼称で、当時（一九七〇年代）は「朝鮮語」の呼称が一般的だった。大日本帝国による朝鮮半島の植民地時代には韓語の呼称と朝鮮語の呼称が別々にあって、解放後一九四八年から特に「朝鮮民主主義人民共和国」にとっては、二つの呼称は二つの国家（と呼んで差し支え

ないだろう)を体現する言語という解釈だったからだ。

一九八四年にNHKハンゲル講座が始まる。一九七六年に市民運動団体として〈NHKに朝鮮語講座を要望する会〉が作られてから八年も経って実現に至ると言う時間がかかった原因の一つは、講座名の呼称の問題だった。NHK講座にハンゲルが使われたので、ハンゲルという文字名も日本では、言語の呼称のように定着してしまっただけが良かったけれど、韓国側、特に在日韓国居留民団が「韓国語」呼称を主張して「朝鮮語」使用に猛反撃したことは、逸話として有名である。

故大村益夫(前早稲田大学教授)はこの紛糾を一九九三年に「先人の労苦に対する顕彰的なものではなく、朝鮮問題にかかわるものが未だに逢着せざるを得ない、苦い経験の里程標的性格を帯びている」と書いた。そう、朝鮮問題に関わる者が、日本人社会から理解されない朝鮮問題と取り組みながら学んでいた朝鮮・韓国語であったのだ。そこには、朝鮮・韓国語を学ぶ少数者としての自負もあったのか? 広まらない状況に對しての焦りも同時に在ったのは事実であるけれど。一方で朝鮮・韓国語を、学ぶ少数派としてアイデンティティもあつたように見受けられる。

東京外国語大学に朝鮮語学科ができたのは七十年代? 違っていたらすみませんが、朝鮮語学科設置反対運動があつたのを記憶している私である。「あれは、不思議な運動でしたな」と石坂浩一(前立教大学教授)は言う。日帝植民地時代に朝鮮人民を管理するために警察・総督府が朝鮮語を学んだ史実を反面教師として考えたわけだけれど、「日本の警察官に流暢に朝鮮語で話しかけられたらどうしよう?」という在日朝鮮人の文もあつた。

外国語を学ぶことに対して朝鮮・韓国語は不思議な様相を帯びていた

のである。

今は、きれいな発音で豊富な数の単語を盛り込んだ会話ができる人たちは多いはずで、歓迎すべきことなのに……。どうも、「韓国語はできるけれど、○○のことは知らないのね」とか「ヨン様に熱をあげている時間に、少しは解放後の歴史を勉強したらどうだ」と仰せになる方もいる。気持ちは良く分かるけれど、そして私自身も内心そう思ってしまうのだけれど、ちよつと外国語を学ぶ意義に目を広げてみたい。

一〇〇年前関東大震災時は、日本語の発音ができない朝鮮人は不逞鮮人のレッテルを貼られて虐殺されたけれど、かつて日本人は朝鮮語の発音が悪いからと軽蔑されたり、傷害などの事件にあつたりしたかしら? 戦後の植民地解放後の韓国旅行中、まずい韓国語の発音で日本人とわかるから、親切にはしてくれなくてもいじめられたりしたかしら? そして、韓国留学生の子供などの間でも、私が学習塾を運営していた経験から言えば、「韓国語が分かつて、自分たちのことを判ってくれる」と、私の発音を「だせえ〜」(ださい)と言いながら楽しんで、人間上下なく良好な信頼関係ができたのである。支配関係を超えて、言語の地位の非対称性も無い関係ができてしまう。職業としての外国語学習習得とは別の世界が、韓国語をマスターした人たちによって日本とかつての被植民地の人々との間に出来ていく、と私は信じる。

そこで、かつての植民地支配を受けた人たちは、「文化の侵略者」とか「支配の責任と謝罪が無い」と朝鮮・韓国語を学んでいる日本人にケチをつけないで欲しい。

自分の語学力は、全然大したことはないと十分わかっている私である。

そして、映画や食べものに魅了されて韓国に関心を持つようになった人たちの他国の文化を愛して勉強する気持ちを、昔の自分が『赤と黒』や『風と共に去りぬ』から外国の歴史や外国文学を知ろうとした十代の自分と重ねて考えてみる。すると、次世代に、朝鮮半島の平和と植民地支配の日本国の責任を理解してもらおう絶好のチャンスになるのではないかしらと思える。

言語学者の田中克彦が言うところの「小言語」を学んだ少数派が、いつまでたってもうまくならない韓国語と五十年間関わってきて、現在の韓国語ブームの動きを見るにつけ、これまでの朝鮮半島と日本の関係を市民の力で作りなおしていけるチャンスにできるのではないかしら？と夢みる。

今日、日韓関係は、市民たちの目をそらさせたまま、強力な軍事同盟に進んでいっている。自分のアイデンティティも思い切って捨て去るところは捨て去り、一方で自分の中にこれまで考えた蓄積はあるのだから、どの歴史問題をどのように伝えていけるか。自分を眺めながら、ヨン様ブームの世代のまた次のBTS世代へとつながっていけるように、自分の意識も変えていけるようになりたいと夢みている。

